



TITLE:

感想2(東京夏の学校に参加して)

AUTHOR(S):

上村, 洸

CITATION:

上村, 洸. 感想2(東京夏の学校に参加して). 物性研究 1966, 5(5): 358-358

ISSUE DATE:

1966-02-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/85853>

RIGHT:

東京夏の学校の感想

しない限り、大きな声では云われない事である。

感 想 2

上 村 光 (東大理)

1. 講義の数について。今年は毎日午前中に1時間の講義が3つありましたが、少し忙しすぎる様な感じがしました。来年度は質問の時間も充分考慮して1時間半程度の講義を2つやる様にしては如何でしょうか。1人の講師が1時間半の講義を3日、従つて1週間に4人の講師位が適當ではないかと思つています。
2. 講義の程度。大体どの程度の層が、生徒の中心になるかによつて講義の程度も違つてきますが、来年は大学院ドクターコース一年の人々も参加出来る様にしてはと希望しています。私としては今年程度の講義を期待したいのですが、一人の講師が4時間をするとして、今年より introductory な部分を丁寧に up to date までとすれば D.C. 1年の人にも無理ではない様に思います。今年の様に1人2時間ないし3時間の講義ですと、introductory な部分はかなりありましたが、ある程度 familiar な field の講義とそうでない field の講義では内容の理解の困難さの程度が予期したより大きかつた様に思います。もう1時間半増して introductory part をそれにあて、充分質問を許せば、up to date の問題の discussion に門外漢でもかなり contribute 出来るのではないかと、従つて School としての実があがるのではないかと考えています。
3. 参加者の人数。100人程度が maximum の様に思います。中々制限するのは大変でしょうが、来年度は半導体国際会議もありますので、Experts は本会議で discuss して頂き、多少今年よりも若い人に門戸を開いて人数を 80 ~ 100 人程度にしぼつてはと思つています。マスターの人をきることは賛成です。ドミトリーは、1部屋2人にしてそれより人数が多い時には Senior の方に Hotel に泊つてもらふようにしては如何でしょうか。
4. informal meeting について。informal meeting は 講義と密接に関連した topics についてやるのが良い様に思います。午後はそれに当て、少グループに分けて大いに discuss をたたかわせるようにしては。